

いて、狂人はそれを奏するのだ。鐘楼から響く夕べの折りの鐘を聞いて、明日にも島を訪れ、その狂人に会おうと話す。彼から何らかの生きる証が得られるかも知れないとの憶測から荒れた海に舟出し、やっと例の狂人に面会する。しかしそこから得るものは何もなく、Julian はイギリスに舞い戻る。愛の破局から狂人になってその運命を辿らねばならない男は、1814年頃の Shelley であるとか、哲学の支柱を失ってしまった彼自身の、Shelley 自

(Essay)

身のヴィジョンともいわれるが、'Julian and Maddalo' にはわれわれ、人間の状況に対する洞察が美しいが、詩人の心の痛みのままに叙述されているとって良いであろう。人間の暗部さえも一瞬のうちに焼きはらわれてしまう戸惑いさえ感ずる 'Prometheus Unbound' の神話の大きいモチーフと異った詩の次元で、われわれの存在を問う詩の世界が 'Julian and Maddalo' にひらけているといえるだろう。

石原 武 ●●● シェリーからの時計

ファニー・イムレイという哀しい女の話をしてしよう。

『無神論の必然』によって神の不在を証明しようとした革命児シェリーはオックスフォードを追われる。ロンドンに出たかれは妹の学友ハリエット・ウェストブルックにひかれ、エジンバラに駈落ちする。ときにシェリー19歳、ハリエット16歳の夏であった。

シェリーは革命的な自由思想に燃えるまま、『政治的正義』の著者、ウィリアム・ゴドウィンに親交をもとめる。ゴドウィンは19世紀初頭の最も進歩的な思想家で、とくにかれの自由結婚の提唱に、シェリーはすっかり心を奪われていたのである。

2人の交友は急速に深まり、シェリーはゴドウィンの家に足しげく通うようになった。ときにはハリエットも一緒だった。かれらの激しい会話を理解するのは、かの女には大変なことだった。かの女は妊娠していた。

ゴドウィンには5人の子供がいた。かれは『政治的正義』出版後四年にして(1797)、ようやく同棲していた女流作家メアリー・ウ

ルストンクラフトと結婚したが、かの女は女兒を産んで死んだ。それから4年して、かれは結婚を嫌いながら、隣りに住む寡婦、クレアモント夫人と結婚し、男児をもうけた。この寡婦には2人の連れ子がいた。ジェーン(後にバイロンの子を産む)とチャールスである。メアリー・ウルストンクラフトが産んだ女兒は矢張りメアリーと名づけられて、才たけた娘に成長していた。これとは別に、ゴドウィン夫婦に関係のない娘が同居していた。かの女はメアリー・ウルストンクラフトがアメリカ人の愛人との間に産んで死別していった娘であった。かの女、ファニー・イムレイはゴドウィン夫婦を、「パパ」「マンマ」と呼んで、おとなしく、控え目に生活していた。ゴドウィン家の暮らしは当然〈火の車〉で、ゴドウィンの2番目の妻はファニーとメアリーに辛く当たった。とくにファニーをいびった。シェリーはいつの間にかゴドウィン家に入りびたりになっていた。1813年にハリエットは女兒を産んだ。その頃からハリエットの生活は自堕落になり、シェリーとの間は冷えた。

シェリーの愛は金髪をいかにも聡明そうに結った17歳の少女メアリーに移っていた。それから間もなく、シェリーはメアリーとジェーン（クレアと改名）を連れてヨーロッパ大陸へ6週間の愛の旅に出る。

三人の娘のうち、ファニーだけがゴドウィン家に残った。おとなしいかの女には愛する人もいなかった。男たちはその控え目な物腰にひかれながら通り過ぎた。かつて、シェリーが愛してくれているのではないかしら、と思える時期があって、かの女はひそかに手紙を書いたりした。しかしはつきり気持を表わせないまま、メアリーの木の実いろの瞳に望を奪われてしまった。二人の娘たちの出奔のショックと窮迫にいらだったゴドウィンの妻はことごとくにファニーをいじめた。ゴドウィンは、自分の食扶持ぐらい稼ぐようにと、繰り返し返すだけだった。かの女は教師になろうと思った。ところが、メアリーとジェーンの不始末が不名誉なレッテルをゴドウィン家に、かの女自身の上にもまで貼ってしまっていて、どの学校の校長も相手にしてくれなかった。

ファニーはレマン湖の畔で愛を嘯いているメアリーが妬ましかった。かの女は手紙を書いた。「私もバイロン卿にお会いしたい。そのお声を聞きたい。かれに夢中な飲み少ない女のことを、どうかかれにお伝えしてください……」

可哀想なファニー！あの暗い借金だらけの家でゴドウィン夫妻につき合っているファニーの手紙を、メアリーもジェーンも、自分たちの愛の冒険とひき比べて、なにか傲慢な思いで読んだ。メアリーは償いの気持ちにかられて、ジュネーブを去る前に、ファニーのために時計を買ってやってほしいとシェリーに頼んだ。

ロンドンに帰ってファニーに会うと、かの女はすっかり落込んでいて、淋しそうで、もういいのと、それ以外何もいわなかった。シェリーに別れを告げるかの女の声は震えてい

た。ゴドウィン家の窮状はそのままかの女の心をすっかり荒廃させてしまったようだった。

ある朝、シェリーはファニーからの奇妙な手紙を受取った。それはブリストルから出したもので、こう書かれていた。「私はあるところにまいます。そこからもう帰ってこないつもりです…」シェリーがブリストルに駆けつけたときには、ファニーは南ウェールズの港町スワンシーに向けて去った後だった。かの女はその宿屋に泊り、疲れているからと部屋に閉じ籠ったまま、翌朝下りてこなかった。内鍵をかけ、かの女は死んでいた。長い褐色の髪を広げ、その枕辺にあのジュネーブの時計が置かれていた。テーブルの上にはアヘン剤のビンがあった。遺書はこう書かれていた。「不運の生まれのものはその命を断つことが、一番いいことだと、やっと決心がつかしました。……私の死をお聞きになってつらい気持ちになることでしょうが、きっと、わたしのようものがいたということも忘れられるでしょう。」

ゴドウィンはシェリーと出奔した不埒な娘メアリーが始めて手紙を書いて、この辛い出来事を世間に口外しないように懇願した。

ファニーの死に動揺するシェリーに、かれの愛を失って実家に帰っていた妻ハリエットが自殺したという悲報が続いて入った。

その頃、シェリーはメアリーとの新しい家をグレート・マーローの美しい田舎町に置っていた。

1987年卒業生『シェリー研究』

シェリーの結婚観 Epipsychidion と
関連して 狩野 昌美
Ode to West Wind のイメージ考察
北川 正視
シェリーとキーツ Adonais を中心に
坂本 綾子